

三条南ロータリークラブ週報

Sanjo Minami Rotary Club



2011. 6.13

No.1999
No.41



出席率	会員49名中33名	
先々週の出席率	91.49%	
ゲスト	GSEチームリーダー	石倉 悟様 (高田RC)
	GSEメンバー	中野大輔様
先週の メイクアップ	6/6 地区諮問委員会 (新潟)へ	馬場信彦君
	6/9 三条東RCへ	荒澤威彦君 広岡豊樹君
		星野健司君 石山莊一君 丸山徹夫君
		永桶俊一君 野島廣一郎君 野中 悟君
		坂井範夫君 佐々木常行君 高橋祐介君
		坪井正康君



会長挨拶

三条南ロータリークラブ 会長
大溪 秀夫

皆さん、こんにちは。

「本日で、この三条信用金庫での挨拶は最後となります。」この言葉は、歴代会長が必ず言われてこられたので、私も引用させていただきました。

実は、会長を任された時から、最後の例会で何の話をしようかと考えましたが、週刊ユネスコの「世界遺産」を参考に、「マザー・テレサ」についてお話ししたいと思います。

マザー・テレサは、並外れた行動力とアイディアでインドのスラム街を舞台に活躍しました。常に前向きな心を持ち続け、アイディアを次々と形にしていき、イエスへのゆるぎない信仰を支えに、「貧しい人の中でも最貧しい人」にすべてを捧げた一生でありました。では、その軌跡をたどってみましょう。

【テレサ、青空学校の教師になる】

シスター・テレサは、17年間の平和で安全なカルカッタの修道院生活に終止符を打ち、1948年8月16日、38歳の時にスラム街へ飛び込みました。その2年前、結核で倒れ、静養の為、ダーズリンへ向かう夜汽車の中で、「貧しい人々の為に生きよ。貧しい人々こそ神そのものだから」という神の啓示を受けたからであります。テレサはこの時自分のいるべき場所を察知したといえます。

テレサは先ず、カルカッタから400km近く離れた街パトナのアメリカン医療宣教修道会へ向かいました。貧しい人々を助けるには、医療の知識が不可欠と考えたのです。4ヶ月の特訓を受け、周囲も驚く集中力で看護学をマスターすると、早々にカルカッタに戻りました。

質素な白のサリー姿で、僅か5ルピーを懐に、向かった先はスラム街のモテイジェルでした。最初に目に飛び込んできたのは、地べたに座り込む子ども達で、「貧しさから抜け出すには教育が必要で、その為に学校を作ろう」と思い、翌日には実行に移していました。作ったのは、青空学校。

四つのテスト

言行はこれに照らしてから—

- I 真実かどうか
- II みんなに公平か
- III 好意と友情を深めるか
- IV みんなのためになるか どうか



国際ロータリー会長 レイ・クリンギンスミス [アメリカ]

第2560地区ガバナー 東山 昶也 [高田]

第4分区AG 蕪澤 喜一郎 [三条南]

会長 大溪 秀夫

幹事 野崎 正明

S A A 平松 修之

事務局 〒955-8666 三条市旭町2-5-10

三条信用金庫 本店内

TEL 0256-35-3477 FAX 0256-32-7095

E-mail info@sanjo-minami.jp

URL http://www.sanjo-minami.jp

テレサは、地面に棒でアルファベットを書き、読み書きを教えました。最初5人だった生徒も1週間後には30人になり、半年後には、黒板や椅子、頑張った子どもに配るご褒美のミルクが手に入るほど、協力者も増えていきました。

【貧しい人たちのために働きたい】

1910年8月26日、アグネス・ゴンジャ（花の蕾）・ボヤジュはヨーロッパ南東部のオスマン帝国領マケドニアのスコピエで生まれました。後のマザー・テレサであります。両親は熱心なカトリック教徒で、彼女は、兄や姉とともに好んで教会活動に参加していました。しかし、9歳の時、貿易商人で市議会議員まで務めた父が突然亡くなり、大黒柱を失った一家の暮らしは一転しました。しかし変わらなかったのは、父がそうしていたように、貧しい人々を家に招き、出来る限り食事を与えて奉仕するという日々で、母は慎ましい生活を強いられながらも、それを守り通したのでした。

そして12歳の頃、神父から、英領インドで奉仕する宣教師の話聞き、「私もインドに行って、貧しい人たちのために一生懸命働きたい」と思い、やがて18歳になった彼女は、この希望を実現させるべく、1928年10月、アイルランドにあるロレット修道会に入会しました。それは母や兄、姉との永遠の別れを意味しましたが、彼女は迷いませんでした。そして12月、インドに向けて出発し、ヒマラヤの麓にあるダーズリンに着くと、そこで修道名テレサ（“小さな花”と呼ばれた控えめな聖女“リシューの聖テレーズ”の名にちなむ）を授かり、修道院で2年間修練を積み、1931年には、ロレット修道会の経営する聖マリア女子高校で教鞭を執るため、カルカッタに向かいました。

希望に燃えて移り住んだテレサでしたが、何かが欠けていることに気づきました。高校はスラム街にあるものの、高い塀の中は、清潔な校舎と花咲く庭のある別天地で、しかも、生徒は裕福な家の少女達でした。テレサは塀の中と外との落差に胸を痛め、校長を務めながら、極貧に喘ぐ家庭の子が多い別の学校の教師を兼任しました。そして、生徒の家を訪問したテレサは、貧困の実態を目の当たりにして愕然としたのです。一家族が2m四方もない部屋で寝起きし、しかも街は、日照りや洪水に見舞われて農村を後にした人々で溢れていました。また、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の対立による暴動で混乱し、多くの難民は公園や駅や路上で暮らし、その為、飢えと病気から屋外で悲惨な死を待つしかないといった実情でした。

【愛と信念のもとに次々と奉仕活動を展開】

そんな実情を見て、テレサは修道院を出る決意をしたのであります。しかし、修道女の身のままで、修道院を出て活動するという異例の発想に、ローマ教皇ピウス12世の許可は容易には出ず、2年後、しかもやっともらったのは1年間の試験期間でした。しかし、許可されないよりましと思ったテレサは、チャンスを活かし、前言を撤回したのは、教皇の方でした。教皇は青空学校の評判を聞き、彼女に新しい修道会を開くことを許可しました。これが「神の愛の宣教者会」の誕生でした。修道院を離れた場での修道会、これもカトリック教会にとっては異例でしたが、彼女は宣教者会の創立者としてマザー・テレサと呼ばれ、国籍も独立後のインドに移すことになりました。

ある日スラム街で死にかけている貧しい老人を、断る病院側を必死の説得の上、入院させました。そのお陰で、名も知らぬその老人は温かいベッドの上で穏やかに死んでいくことができました。これを機に、1952年8月、瀕死の病人を収容する医療施設「死を待つ人々の家」を開設しました。道端で誰にも看取られず、息絶える人がいてはいけないという思いからでした。テレサは、生きるためではなく、死ぬための施設をつくったのであります。3年後、今度は生きるための施設「孤児の家」を開きました。貧しさから道路に置き去りにされる子ども達を見かねての決断でした。

【ピンチをアイディアで切り抜けるしなやかな女性】

テレサのアイディアは枯渇することがありませんでした。街路に転がっているココナッツの殻の繊維を使って商品を作ろう！彼女は貧困で喘ぐ失業者を集め、ゴミの山からココナッツを回収し、敷物やタワシを作らせました。また、その名声が高まり、国内各地へ出向かなければならなくなると、移動の飛行機の費用を浮かせるため、航空会社に「スチュワーデスの助手に使ってもらい、その分を運賃から割引いて」と訴えました。この奇想天外な依頼に、航空会社は困惑し、結局、その熱意に押され、運賃を無料にしてくれました。

さらに彼女の豊かな着想と行動力は、当時インドに700万人いたハンセン病患者のためのコミュニオン、車での移動診療所、さらには患者と家族が共に暮らす理想郷「平和の村」の実現へと向かいました。この建設には、広大な土地と施設、莫大な資金を要しました。そんな矢先、インド訪問の終えたローマ教皇パウロ6世から、帰国に際し、訪問中の移動のために寄附された高級車リンカーン・コンティネンタルが贈られました。テレサは「車を賞品に、宝くじを売る」という、さすがの教皇にも思いもよらない破天荒な使い道を思いついたのでした。このアイディアは大成功し、集まった金額は、車の価格の5倍に達し、高級車は容易に「平和の村」に早変わりしました。

勿論、全てが順風満帆であったわけではありません。他宗教からの嫌がらせ、病気への無理解による妨害など・・・けれど彼女の信念はどんな障害も打ち砕いていきました。

1979年、テレサにノーベル平和賞が贈られました。彼女は、木綿のサリー、タコだらけの裸足に色の褪せたサンダル、といういつも通りの姿で授賞式に臨みました。彼女は授賞パーティの開催を断り、その費用をカルカッタの貧民の食事に充てました。

数年後、突然心臓の痛みに襲われた時、彼女は、医師に「特別な治療は必要ありません。貧しい人と同じよう

に死なせて下さい」と言い、手術を拒みました。彼女は、以後も活動を続けましたが、1997年9月5日、87歳で永遠の眠りにつきました。葬儀では、世界中の人々が民族、宗教を超え、その死を悼み、彼女の遺体は、生前起居していたカルカッタの「神の愛の宣教者会」本部に埋葬されました。そして今、ヴァチカンでは、貧者に無償の献身を続けたマザー・テレサを、聖人に列するための正式の手続きが行われています。

以上、「さんしん」での最後の挨拶として、マザー・テレサの生き方についてお話をさせていただきました。

幹事報告

野崎 正明 幹事



鈴木重吾ガバナーノミニー事務所より

2011～12年度ガバナーエレクト事務所開設のお知らせ

住所 〒940-0066 長岡市坂之上町 1-2-1 長岡グランホテル 5F
TEL 0258-89-7041 FAX 0258-89-7043
E-mail s.suzuki@rid256Oniigata.jp

「育子からの手紙」三条上映実行委員会より 映画チケットをお預かりしています（当クラブ後援）

チケットご希望の方は事務局へ 1枚 1,000円

委員会報告

次年度社会奉仕委員会

熊倉 高志 次年度幹事

五十嵐川クリーン作戦 参加ご協力のお願い

先般、7.13 水害により活動を休止しております「三条クリーン協議会」の構成団体者会議が開かれ、今後の活動計画についての協議がございました（野中委員長出席）。結果、しばらくはこの会の活動再開は難しいようです。この会に代わって、現在、「五十嵐川を愛する会（事務局：三条市建設部都市計画課）」が五十嵐川堤防の除草やゴミ拾い、花の植栽など活動を進めておられ、その事業活動の一環として、「五十嵐川クリーン作戦」を計画されました。つきましては、当クラブもこの活動に協力致したく、理事・役員、社会奉仕委員会の皆様にご参加、ご協力をお願い申し上げます。

日 時	平成23年7月2日（土） AM 9:00～10:00（☂ 雨天中止）
集合場所・時間	AM8:55 一新橋 橋中央の歩道部分
作業内容	五十嵐川、河川敷のゴミ拾い（可燃物、不燃物 分別回収）
服 装	軍手持参の上、作業しやすい服装と履物

ニコニコボックス

NIKO-NIKO BOX

～ 6月13日 9,000円
今年度累計 684,000円

大 溪 君 大震災から3ヶ月が経ちました。1日も早い復興が待たれます。6月も中旬に入り、熱中症に注意を払う時期となりました。ご自愛願います。本日、GSE帰国報告があります。よろしくお祈りします。

野 崎 君 本日は、クラブ・フォーラムとGSE帰国報告会です。石倉チームリーダー、メンバーの中野さん、よろしくお祈り致します。

安達君 石倉GSEチームリーダー、GSEメンバー中野さん、本日はご苦労様です。

鈴木(囿)君 ①GSE帰国報告の皆様と担当の安達さん、ご苦労様です。
②本日は「クラブ・フォーラム」です。よろしくお祈り致します。

渡 邊 (久) 君 昨日、高校の同級会に参加。旧交を温めてきました。

赤塚君、田中君、銅冶君、武藤君
BOXに協力致します。

Club Forum

鈴木 囿彦 会長エレクト

- ① 2011～12年度クラブ会長主要目標及びクラブ運営方針について
- ② 2011～12年度収支予算（案）について
- ③ 2011～12年度例会及び行事計画について



「オランダ派遣を終えて…」

GSEメンバー 中野 大輔 様
(新津中央 RC 推薦)



今回、4月15日から約一ヶ月に渡り、GSE派遣プログラムでオランダに行ってきました、

私は今、父の経営する種苗会社で、現在社員として勤務しています。先代社長である祖父の代から、球根の卸業に携わっております。特にチューリップの球根は産地である新津五泉地区以外で、輸入球根として、オランダの商品を多く取り扱ってきました。

ですが、昨今、球根を始めとする園芸商品の多角化と不況で、球根卸業も過渡期に来ているといっても過言ではないのが現状です。

現社長である父は、近年の花ビジネス多角化に対応し、事業の多角化を進めてきました。フラワーアレンジ教室の開催、店舗内のグリーンインテリアメンテナンス等、卸業の枠を超えた事業を展開しています。

昨年度よりイベント部門も追加し、その一環として音楽スタジオと音楽教室の運営を始めました。

現在私はイベント業務部門の部門長として、音楽教室の講師、小中規模での音響、音楽イベントのオーガナイズ、そして演奏等、幅広い音楽活動を行い、音楽事業の拡大に務めています。

去年の夏、上司でもある母から、「オランダに行ってみないか？」という話を頂き、最初は不安な気持ちもありました。

一番のネックは、英語が十分に喋れないことです。一年半近く、毎週2回の英会話レッスンを受講し、今まで何度か、観光や研修で海外に渡った経験はありましたが、一ヶ月の渡航、そしてホームステイは初めての経験なので、現地で上手く立ち居振る舞えるか心配でした。

ですが、周りの友人や上司、そして妻から励ましの言葉を貰い、オランダ行きを決意し、9月23日、GSEプログラムの採用面接を受け、見事採用され、オランダに派遣されることが決定しました。

毎月一度のオリエンテーションに参加し、4月15日、私達GSE派遣メンバーはオランダに旅立ちました。

スキポール空港に着いていきなり、私達は時差ボケも感じている間もなく、電車に乗ること3時間、Maastrichtという、オランダ最南端の町へ行きました。

オランダのスキポール空港は、北側に位置しています。私は、何故いきなり南側に行くのか考えてみました。

会社での飛び込み営業に例えてみると、雑居ビルへの飛び込み営業は、最上階から下へ下へと降りて行って飛び込みをするのが基本だそうで、最上階から始めるのは、一階から昇ったのでは途中で頑張りがきかなくなるからだ、聞いたことがあります。

GSEプログラムは、そのような心理状況を考えた上で組み込まれた内容なのだ、と、帰ってきて実感しました。

その後、Bladel、Valkenswaard、Nijmegen、Tielと、徐々にオランダを北上し、最後にEindhovenにて地区大会に参加して、GSE派遣プログラムを無事終了することができました。

各地の位置については、右記をどうぞご覧下さい。

4週間のプログラムを通じて、色々な企業や場所に訪問しました。テレビ、ラジオ等のメディア会社、製造会社、郷土資料館、大聖堂、博物館、音楽スタジオ、音響会社、ガーデンセンター等、様々な物を見て、スポンジが水を吸う様に、色々な物事を吸収できたと実感しています。

ホームステイについても、僕の拙い英語をしっかりと聞き入れてくれて、上手くコミュニケーションがとれたと思っています。

一番のネックだった英語力も、この4週間で少しは上達したと思います。この経験を忘れない為にも、今現在通っている英会話レッスンは、継続して受講していきます。



そして来年は、自分達がオランダから来るGSE派遣メンバーを受け入れる番です。
私は今、海外留学生をサポートするAFSという組織のボランティアスタッフをしているので、そこから得た経験と、今回のプログラムで得た経験をミックスして、日本に派遣されたメンバーが、気持ち良くプログラムを遂行できるように努力していこうと思います。

最後に、今回のGSE派遣プログラムに推薦して下さった方々に、本当に感謝しています。とても有意義な4週間のオランダ生活を過ごすことができました。そして、色々サポートして頂いた、GSE委員の皆様、チームリーダー含めGSEメンバーの皆様、そして、1か月にわたり陰ながら応援してくれた家族に最大級の感謝を送りたいと思います。ありがとうございました。

GSEチームメンバー紹介

地区 GSE 委員 安達 裕 会員

専門職務に携わる、若い人々の国際交流プログラム・研究グループ交換を国際ロータリー第2560地区では3年ぶりに、国際ロータリー第1550地区(オランダ)と行う事に決定しました。

職業訪問・文化体験・親睦の機会・異文化体験を体験する約一ヶ月間の派遣(2011年4月中旬より5月中旬)。本年より国際財団の方針で、派遣・受入を単年度でなく、2年にわたり行う事となり、当地区では本年度(東山年度)は派遣となり、次年度(石本年度)はオランダより受入となります。

派遣のメンバーは、オリエンテーションを数回行い、英会話の語学研修と語学力を身につけ出発しました。

【研究グループ交換】 チームリーダー 石倉 悟 (高田RC)
メンバー 大出 恭子 (十日町北RC ｽｯｯ-) 小出 慎一 (新潟東RC ｽｯｯ-)
式部 朱里 (新潟南RC ｽｯｯ-) 中野 大輔 (新津中央RC ｽｯｯ-)

※なお、2012年3月25日~4月21日、オランダより受入れが決定致しました。

当第4分区は4月1日~8日の1週間受入れ担当の予定です。その折にはご協力よろしくお願い致します。

ROTARY NEWS



国際ロータリーニュース

2011年 6月 13日

ロータリーの初代事務総長

7月1日、ジョン・ヒューコ氏が12代目のロータリー事務総長に就任します。今回は、ロータリーの初代事務総長、チェスリー・ペリー氏についてご紹介いたします。

チェスリー・レイノルズ・ペリー氏は、米西戦争帰還兵で元シカゴ市立図書館職員でした。1910年8月、結成間もない全米ロータリークラブ連合会から全会一致で幹事に選出されたペリー氏(役職名が「事務総長」に変更されたのは、退任の直前、1941-42年度のことでした)。この役職は月給100ドルの非常勤職であり、就業時間数は具体的に決めないというのが条件でした。

1912年、この役職は常勤の幹部職となり、理事会がペリー氏の昇給に同意しました。当初、シカゴのラサール通りにあった彼の事務所が、全米ロータリークラブ連合会の本部として使われていましたが、1911年、ディアボン通りとモンロー通りの角にあるファースト・ナショナル・バンク・ビルに本部が移されました。ペリー氏の在任中、本部はなんと5回引越しをし、そのいずれも賃貸ビルでした。

歴代事務総長の中で最も在任期間の長かったペリー氏は、1911年から1928年まで「ザ・ロータリアン」誌の編集者兼マネージャーも務め、1925年2月には初のロータリー国際事務局をチューリッヒに設立しました。1940年、ペリー氏は退職の意思を表明しましたが、後任者フィリップ C. ラブジョイ氏の研修と引継ぎのため、その後もしばらく事務総長職に留まりました。ペリー氏を1942-43年度RI会長に指名しようという声が多く、クラブから上がりましたが、ペリー氏は「お気持ちはありがたく受け止める」と述べながらも、指名を辞退しました。

退任後も、ペリー氏はシカゴロータリークラブに所属し続け、1944-45年度にクラブ会長を務めました。1954年、ロータリーは、氏の長年の貢献を称えて「名誉事務総長」の称号を贈ろうとしましたが、ペリー氏はまたもこれを辞退し、普通のロータリアンとしての役目を果たすことを望みました。

1960年2月21日、87歳でペリー氏は他界しました。



ロータリー初代事務総長
チェスリー・ペリー氏

表紙について

石本 正 いしもとしょう (島根県出身)
1920-

■「青衣立像」 1979(昭和54)年作
東京都現代美術館蔵
ロータリーの友 1995年10月号表紙より

三条南ロータリークラブ週報

2011. 6.13

No.1999 No.41